

第56回全国切手展 JAPEX2021 誌上予告!

11月5日(金)～7日(日)の3日間、浅草の東京都立産業貿易センター台東館で開催される JAPEX2021。注目を集める企画出品『郵便創業150年 手彫切手とその時代』展より

企画出品『郵便創業150年 手彫切手とその時代』展より

『Japan 1871-1876 Hand-Engraved Stamps』(祖父江義信氏)より。



[60%]

▶龍100文貼最初期カバー。大型検査済(篆書)消、明治4年3月5日大坂差立、西京宛。郵便創始5日目の使用例で、現存する最古使用例から2番目のもの。

▶龍5銭ベルア紙縦連貼重量便。東京角検消で旧暦差立、新暦到着の跨改暦カバー。明治5年12月1日(1872.12.30)東京差立、明治6年1月8日(1873.1.8)山口到着。通送中の明治6年1月1日に太陰暦から太陽暦に改暦。



▶洋紙桜30銭仮名「イ」貼、米国宛15銭料金の2倍重量便。1875年3月25日横浜差立、4月15日サンフランシスコ到着。1875年1月1日外国郵便開始から7便目、コロラド号で運ばれた初期外郵カバー。差立印、PAIDALL印、到着印とも表面に押されたカラフルなカバー。[60%]

手彫切手の
主な変遷



■龍切手/文単位(龍文)(明治4年/1871年)：明治4年4月20日に発行された日本最初の切手。龍銭切手とともに手彫切手唯一の2色印刷で、目打や裏糊はない。[70%]

■龍切手/銭単位(龍銭)(明治5年/1872年)：通貨単位が改められることに伴って額面を変更して発行。この切手から初めて目打が施された。[70%]



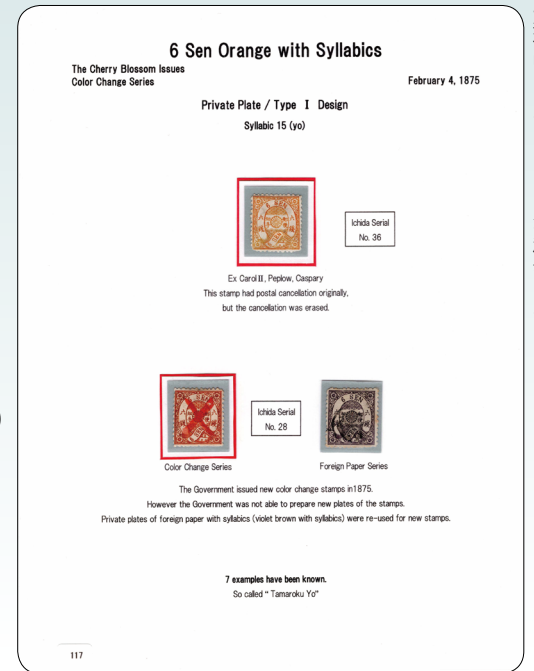
■桜切手 和紙・松田印刷&政府印刷(明治5年/1872年)：全国に郵便が整備され、切手の需要が高まったため、効率の悪い2色印刷から1色印刷へと変更し、発行された。

■桜切手 和紙・仮名入り(明治7年/1874年)：切手の枚数管理などを図るため、切手の一隅に仮名(イ・ロ・ハ・ニ・ホ・ヘ・ト…)を入れて発行された。

『JAPAN 1871-1876 Hand Engraved Issues』(山田祐司氏)より。

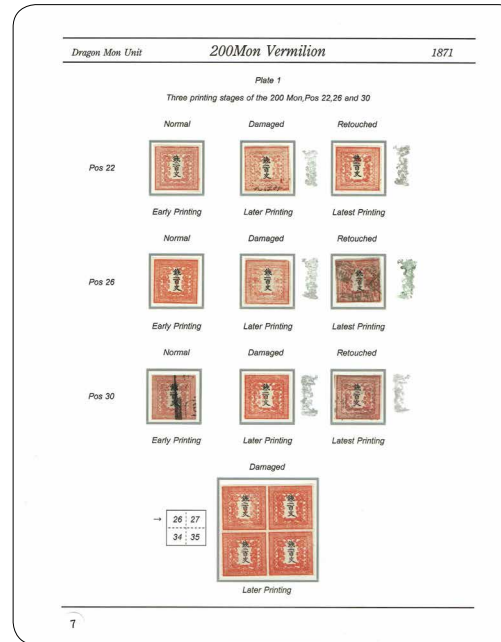


日本切手史上最大のエラー切手と言える「龍500文逆刷」。現存唯一の切手で1973年に日本のオークションに登場し、広く知られるようになった。

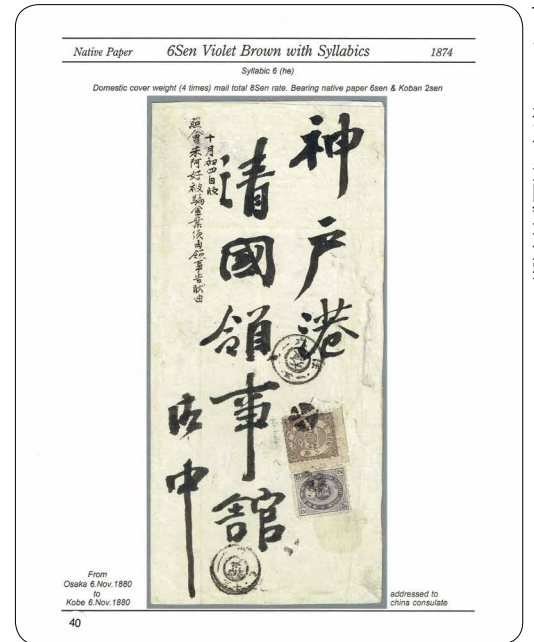


「玉六のヨ」(洋紙桜改色6銭の仮名「ヨ」)の愛称で呼ばれる手彫切手の中の大珍品。これまでに7点が確認されている。

『Japan Hand-Engraved Stamps 1871-1876』(小山 隆氏)より。

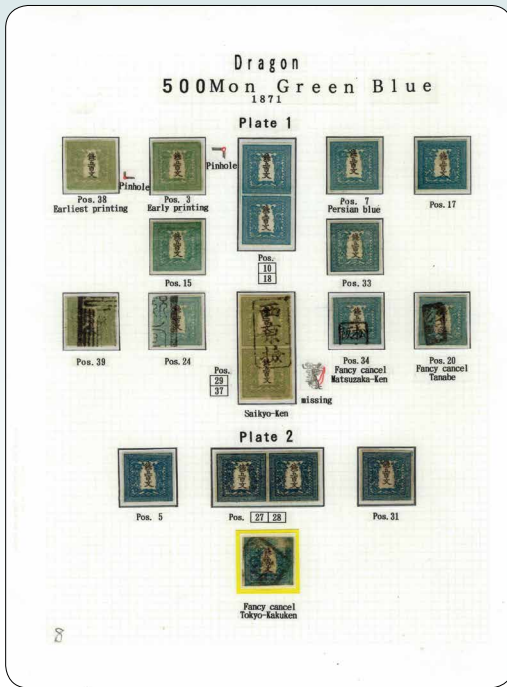


龍200文の第1版22番・26番切手に見られる右龍損傷と右龍修正再刻(リタッチ)と、30番切手に見られる左龍損傷と左龍修正再刻(リタッチ)。

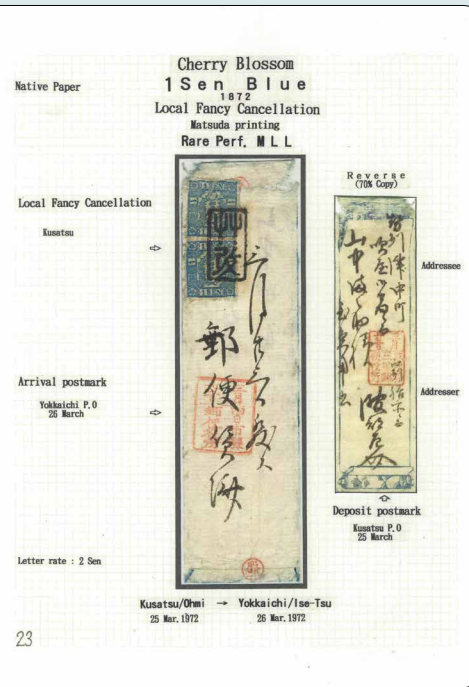


和紙桜6銭仮名「へ」・旧小判2銭貼書状4倍重量便。大阪・明治13年11月6日、神戸・清国領事館宛。

『Japan Hand-Engraved Stamps 1871-1876』(瀧川 忠氏)より。

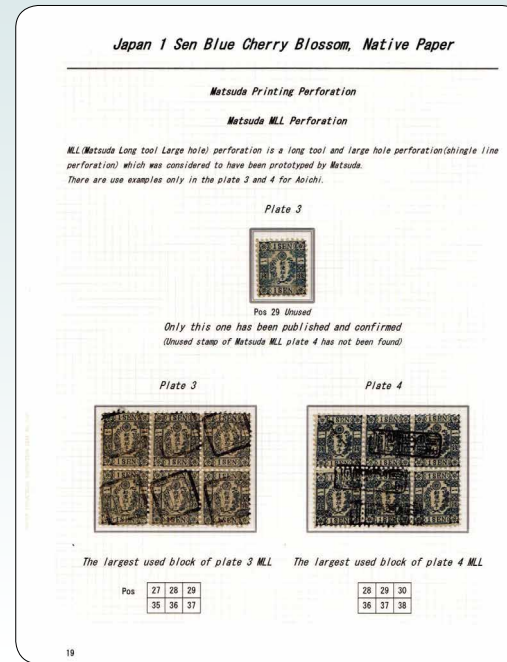


龍500文。第1版では刷色違いにこだわり、縦ペアも未使用と使用済で刷色を違え、使用済には火炎落ちの変種エラーがある。第2版の使用済は東京角検



和紙桜松田印刷1銭のMLL目打は有名だが、その大半は単片切手に見られる。このカバーは和紙桜1銭MLL目打の縦ペアが貼られたもの。

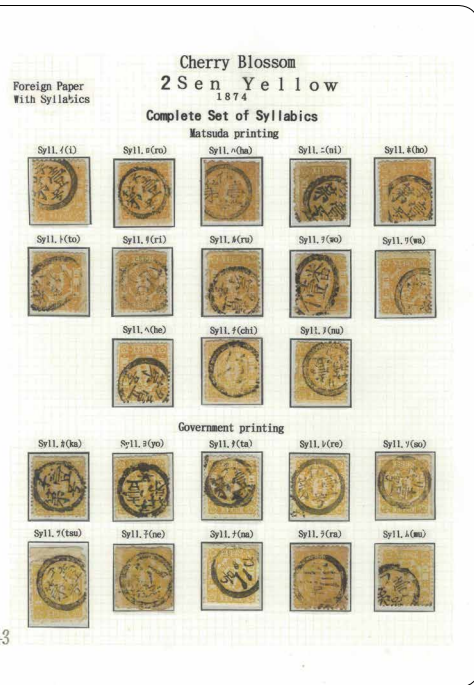
『Japan 1 Sen Blue Cherry Blossom, Native Paper』(深山浩永氏)より。



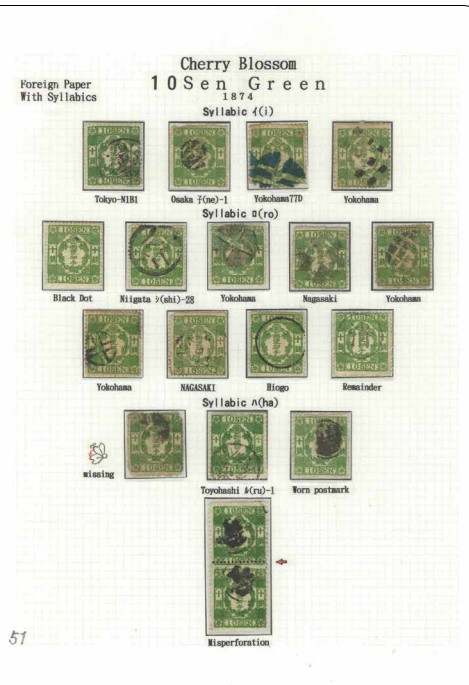
和紙桜松田印刷1銭の第3版に見られる唯一の未使用MLL目打と、第3版と第4版MLL目打それぞれの使用済最大ブロック。



和紙桜政府印刷1銭・2銭黄・4銭3枚貼、弘前からシカゴ宛。外国郵便取扱開始約1カ月半後の1875年2月18日差し出しの初期外国郵便。



洋紙桜2銭黄色。教科書的に、仮名入り23種(民間原版13種と政府原版10種)を記番印で揃えたりフ。



洋紙桜10銭の仮名「イ・ロ・ハ」を揃えたりフ。仮名「ハ」には縦ペアを加えている。



和紙桜政府印刷1銭には全部で版が26存在するが、版により希少性が大きく異なる。上は特に希少な版で、左から第2版、第7版、第14版、第19版のいずれも未使用。[原寸]



和紙桜政府印刷1銭の第26版には通常の切手のほか、「見本印刷」、「輸出用印刷」と呼ばれる輸出用に印刷されたものがある。上はその「見本印刷」で、左が目打9S、右の2枚が目打9S×11S。[原寸]



■桜切手 洋紙・仮名入り(明治7年/1874年)：切手の用紙は和紙が使用されてきたが脆弱なため、洋紙に変更された。8額面とも仮名入りだが、当初、4銭と30銭のみ仮名が入らなかった。



■鳥切手(明治8年/1875年)：明治8年1月1日から取り扱いが開始された外国郵便に合わせて発行。当時としては世界的にも斬新な鳥圖案。



■桜切手 改色・仮名入り(明治8年/1875年)：発行数の多い低額面に高価なインクが用いられており、これを是正するため改色したと言われる。高額切手を含め、すべて低額切手と同サイズに統一された。当初、1銭と4銭のみ仮名がなし。

■桜切手 圖案改正(明治8・9年/1875-6年)：仮名を削除することとなり、仮名があった部分をリボン結びのデザインに変更。5銭は新額面。

招待出品『日本国際切手展2021 凱旋展』より

『Indian Campaigns』(小岩明彦氏)より。

▶1856年から1858年のペルシャ遠征の際に使用されたインド無目打2アンナ切手貼“131”消力カバー。ペルシャ遠征の際に使用されたインド無目打切手貼のカバーは、軍事郵便収集家、インド伝統収集の収集家の双方に高い人気がある。本カバーは確認されている2アンナ貼の4通のうちの1通で、最も状態の良いもの。[75%]



◀1857年から1859年のインド大反乱(セポイの反乱)の際に使用された英国レッドペニー貼カバー。イギリスの兵士は1ペニーという低料金で、英領のどの場所からも軍事郵便を送ることができた。本カバーはインド大反乱の際に、陸軍軍人によって使用されたことが確認されているレッドペニー貼軍事郵便2通のうちの1通。[75%]

▼1831年から1832年のナニング戦争の際に使用されたスタンプレスカバー。ナニング戦争はイギリス東インド会社統治時代に、マライ半島にインド軍が派遣された唯一の戦争。この戦争の際の軍事郵便は他に確認されておらず、本カバーはマレー半島の郵便史においても重要な存在となっている。[70%]

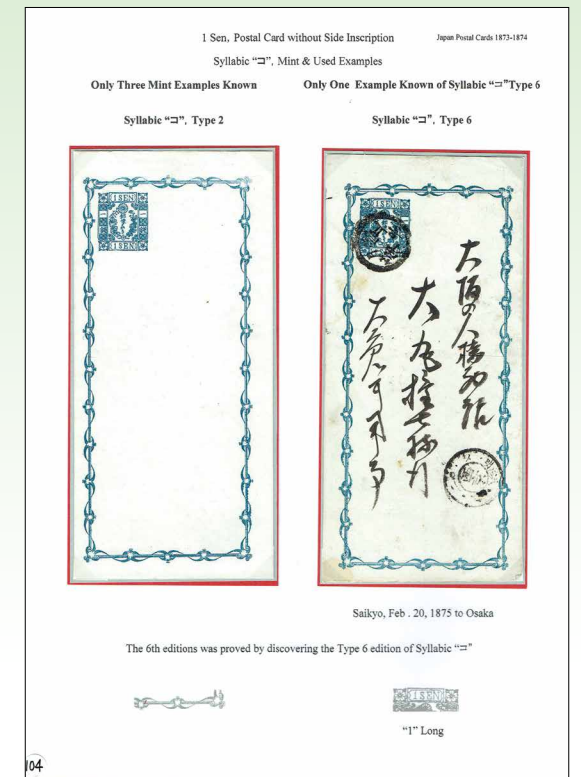


▲1867年から1868年のエチオピア遠征の際に使用されたインド6アンナ8パイサ切手貼“F.F.”消力カバー。エチオピア遠征の際に使用されたインド切手貼“F.F.”消力カバーは、インド関係のみならずエチオピア関係の収集家にも高い人気がある。本カバーは確認されている唯一の13アンナ4パイサ料金のマルセイユ経由のカバー。[75%]

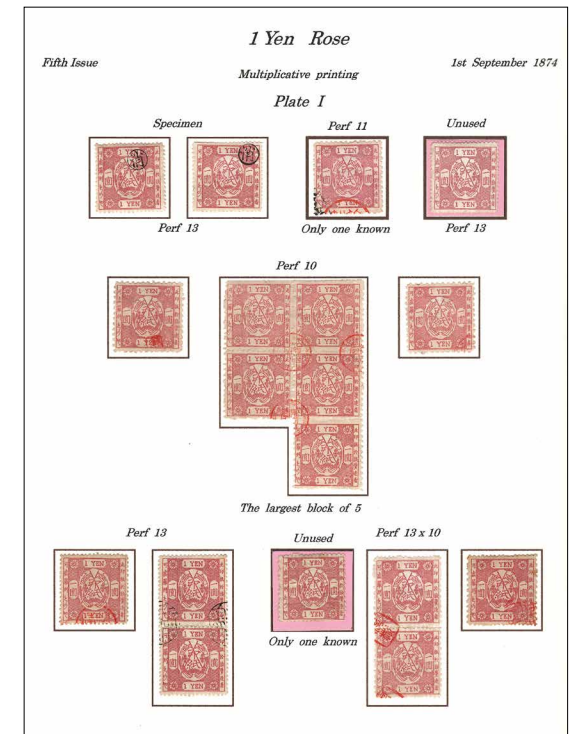
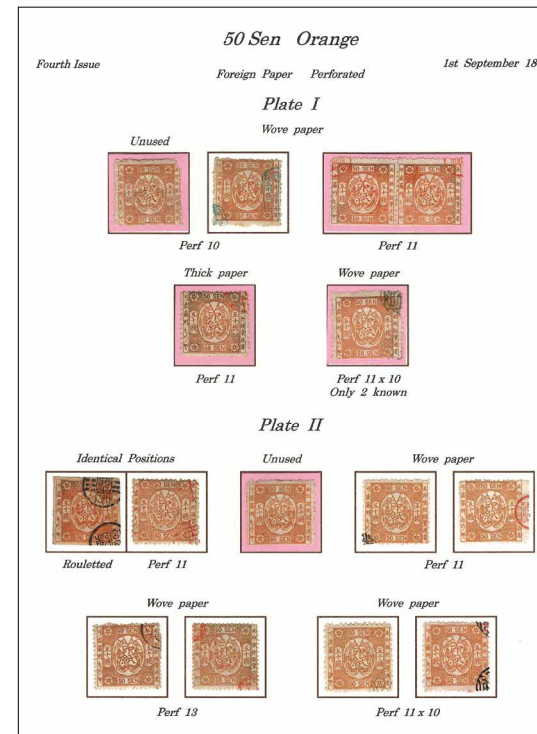
『Postal Cards of Japan 1873-1874 Cherry Blossom Issue』(斎 享氏)より。



日本の切手、はがきの中で、芸術的に見ても「紅枠はがき」は最高の出来栄で、手彫の特徴を生かした紅枠はがきを製造面で展開。左・紅脇半銭の唐草模様の枠線の間違って1銭の枠線に使用したエラー、右・枠なし1銭仮名「コ」の未使用とタイプ6。



『The Hand Etched Documentary Revenue Stamps of Japan, 1873-1874』(長谷川 純氏)より。



第1次から第5次に分類した33種類を、版別を中心に各種の使用例を証書で示した。エラーシート、大きなブロックなども展示。布告や布告の原案原稿、みほんのほか、目打バラエティも知られているものはすべて展示している。